



Title	あとがき
Author(s)	光本, 滋
Citation	高等継続教育研究, 4, 169-169
Issue Date	2005-09-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35142
Type	bulletin (other)
File Information	4_p169.pdf



[Instructions for use](#)

あとがき

ようやく『高等継続教育研究』第4号をまとめることができた。インタビューに協力いただいたり、貴重な資料を提供してくださったりした皆さんにこの場を借りてお礼を申し上げるとともに、報告書の完成が遅れたことをお詫びしなければならない。

これまでの調査では、特に大学が立地する地域社会との関係で社会貢献活動を行ったり、大学改革をリードしたりしている方々へのインタビューを重ねてきた。その中から次第に自覚されてきたのは、大学側だけでなく、地域の側から問題をとらえる視点をもつ必要があることだった。そうした問題意識から、2005年度の調査では、地方自治体、地元地域の社会福祉施設や高等学校において調査を行うことにした。地域の事情に疎い者が行う聴き取りであるだけに、現地の方々から見ればあるいはピントのずれた質問などもあったかもしれないが、調査者にとっては学ぶところの多い、大変有益な調査であった。

個人的には、学生ボランティア活動が地域の療育の質にも影響を与える重要な役割を果たしてきたという、紋別市幼児療育センター、有坂さんのお話が特に印象に残った。このような学生サークルを立ち上げ、今日までその担い手あるいはサポーターとして活動してきた教員・学生の努力は大学側にどのように評価されているのだろうか、同時に気になった。道都大学の「自己点検・評価報告書」が公表されていないので分からないが、大学の地域貢献をきちんと点検することは、大学自身にとっても簡単ではないはずだ。地域側の視点を生かすことができれば、この大学が紋別に存続することの意義についての評価も違ったものになっていたかもしれない。

もちろん、大学には大学の、地域側には地域側の視点と論理があるのは当然であり、両者はすぐに一致するものではない。問題は、日本には大学側の視点と地域側の視点とを持ち寄り、ときにはたたかわせることのできる機会があまりに少ないことではないかと思われる。オホーツク・大学間交流協議会が、研究者同士の交流の場を「公開交流セミナー」として地域住民にも広げているのは、そうした現状に対する問題提起ではないか。そして、困難な物的条件にもかかわらず15年にわたって活動が継続されている理由は、地域にそうした場をつくることの価値が多くの人々に認められ、共有されているからではないだろうか。こうしたことを確認するためにも、実際のセミナーに足を運んでみたいと思う。

光 本 滋